黄金の郷

こしぇるびと

つむぐストーリー vol.121

高い志のもと、日々“キラリ”と光る活動をしている人たちがいる。“黄金の郷”いわて平泉を支える、魅力溢れる“こしぇるびと”のメッセージをシリーズで紹介していく。

地域の方々に喜ばれる野菜市に

花泉町涌津　花泉ふれあい野菜市

余剰野菜の有効利用を図って

ちらちらと雪が舞う中、柔らかな太陽の光が顔を出す。新年初めての野菜市。早朝の店内には、新鮮な野菜を持ち寄り棚に手際よく並べる会員たちの姿。開店と同時に利用客が訪れ、棚に置かれた野菜が次々と売れていく。

1992年10月23日、県内で2番目の産直としてスタートした花泉ふれあい野菜市。「余剰野菜の有効利用を図り、健康で豊かな食生活を築きながら、消費者に喜んでもらえる野菜市を通して、地域づくり、仲間づくりを目指そう」とJA女性部の中のグループとして発足した。33年目となった現在、16人の会員が野菜作りに励んでいる。

たくさんの活動を通して

当初は週に1回、旧Aコープはないずみ店の駐車場にテントを張って客を出迎えていた。一関文化センターなどに移動して販売を行ったこともあった。現在は、空き施設を改修し、看板と商品棚などを整備した、JA花泉支店向かいの店舗で、毎週火、金曜日に開いている。また、学校給食への提供も行っている。

利用客は地域の人が中心だが、宮城県北や盛岡市からも訪れる。店内は朝8時の開店と同時ににぎわい、時にはあっという間に売り切れになるが、野菜がなくなっても会員や客の声はやまない。お茶を飲みながらの交流が続く。

常連客から会員を「指名」して注文が入るのも、野菜市が長く続き、客との交流が深まっている証し。会長を務める千葉トシコさんは、「自分で丹精込めて生産した野菜が売れるとうれしいし、張り合いになる」と消費者の反応にやりがいを感じている。

地域のみんなが支える野菜市

会員は、得意分野を生かして野菜作りをする。昨年の猛暑の影響で、今冬はハクサイやホウレンソウなどの葉菜類が不足している。鳥獣の被害も多くなり、対策が必要になってきた。

昨年度は、同じく野菜市を行うJA女性部一関中央支部中里支部との交流も図った。店舗の見学や畑での研修を通して交流を深め、技術の研さんも欠かさない。

千葉さんは「地域のみんなに支えられて今まで続けてくることができた」と感謝する。地域の人たちが気軽に立ち寄れる野菜市を目指し、会員たちはこれからも元気に野菜作りに励み、そして居場所づくりにも力を注ぐ。

PROFILE

花泉ふれあい野菜市
会長
千葉 トシコさん（85）
Toshiko Chiba
花泉町老松

ＪＡ女性部花泉中央支部内の産直グループ。地域に根差した野菜市をモットーに笑顔が広がる野菜直売所づくりに励む。会員16人。